

令和 5 年度病害虫発生予報 第 8 号 (3 月予報)

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
イチゴ	アブラムシ類	平年並	やや多い
	アザミウマ類	平年並	やや多い

○気象予報 (近畿地方の 1 ヶ月予報 : 2/24~3/23)

気温 : 平年並み 降水量 : 平年並み 日照時間 : 平年並み

○今月の農業適正使用のポイント

- ①イチゴは栽培期間の後半に入ります。農薬を使用する場合は、これまでの使用履歴を改めて確認し、1 作当たりの使用回数を超過しないように注意してください。特に複数成分の混合剤 (パンチョ T F 顆粒水和剤やショウチノスケフロアブルなど) を使用する際は、成分ごとの総使用回数を超過しないように注意してください。
- ②イチゴ等の授粉にミツバチやマルハナバチなど訪花昆虫を使用する場合や、天敵製剤を放飼している場合は、使用する農薬の影響日数をあらかじめ確認し、危害が発生しないようにしましょう。
- ③春の気温上昇に伴って薬害が発生しやすくなります。ハウス内で農薬散布する場合は、ハウスサイドを開けるなどして通気を確保しましょう。閉め切った状態で湿度が高くなると、薬液の乾きが遅くなり、薬害が発生しやすくなります。

○今月の病害虫対策のポイント

- ①春の気温上昇と高湿度条件が重なると、べと病や灰色かび病などが発生しやすくなります。予防散布を励行し、施設栽培では気温上昇時にはハウスサイドを開けるなどして換気を行ってください。
- ②施設栽培では春のアブラムシの飛び込みが始まる時期になります。またハウス内に残ったアザミウマ類やハダニ類が、気温上昇によって増え始める時期です。葉裏や花をよく観察して初期防除に務めてください。
- ③イチゴ後にトマトなどの半促成栽培を行う場合は、栽培終了後の残さを持ち出すなど、イチゴの病害虫を後作に持ち越さないよう注意します。

※農業に関する情報は、令和 6 年 2 月 27 日現在の登録内容に基づいて記載しています。

I. 野菜類

1. イチゴ

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期 : 平年並 発生量 : 平年並

予報の根拠

- 1) 2 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 9.1%、発病小葉率 0.2%でした。
- 2) 今後気温が高く推移することで病勢が急速に進展する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発病果および果房等の伝染源は、見つけ次第、直ちに除去します。
- 2) 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しないようにします。
- 3) 薬剤散布前には古葉かきを行い、葉裏まで薬剤が付着するように丁寧に散布します。薬剤散布の 2~3 日後に、葉裏の白色の菌そうを確認し、防除効果が低い場合は、他

の系統の薬剤に切り替えます。

- 4) 発病確認時は、1週間間隔での複数回の薬剤の散布を行うことで効果が安定します。S DHI 剤であるパレード 20 フロアブル、DMI 剤であるパンチョ TF 顆粒水和剤、ラリー 乳剤、その他の系統であるサンヨール、ジーファイン水和剤等を使用します。

(2) ハダニ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや少ない**

予報の根拠

- 1) 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は27%、平均寄生株率は7.6%でした。
- 2) 今後、気温の上昇にともなって増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) カブリダニ製剤を導入しているほ場では、ハダニが一時的に増加しやすい時期です。葉裏をよく観察して、ハダニ/カブリダニ比が30よりも大きい場合や、ハダニの発生のつぼが見られる場合は、カブリダニ製剤に影響の小さい殺ダニ剤（マイトコーネフロアブルやダニオーテフロアブルなど）を散布した後、チリカブリダニの追加放飼を行います。
- 2) 薬剤で防除する場合は、古葉かきを行ったうえで、葉裏に薬液が付着するよう散布します。なお、取り除いた古葉は通路に放置せず、施設外に持ち出します。
- 3) ミツバチ、マルハナバチ放飼ハウスでは、ハチに対する安全期間を確かめて薬剤散布を行います。
- 4) 各種殺ダニ剤に対して感受性の低下したナミハダニが増えています。殺ダニ剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

(3) アブラムシ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率36%、平均寄生株率2.8%でした。
- 2) 今後、気温の上昇に伴って、増加が見込まれます。また、換気回数が増えることから、施設内へのアブラムシ類の侵入機会が増加します。

防除上の注意事項

- 1) ハダニ防除にカブリダニ製剤を導入しているイチゴハウスでは、カブリダニ類に影響の小さいウララ DF またはチェス顆粒水和剤を使用します。ただし、感受性が低下傾向にありますので、虫の寄生部位を狙って丁寧に散布します。
- 2) ミツバチ、マルハナバチ放飼ハウスでは、ハチに対する安全期間を確かめて薬剤散布を行います。
- 3) 多くの殺虫剤に対して感受性が低下したワタアブラムシが発生しています。薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤を連用しないようにします。薬剤の効果が低い場合には、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(4) アザミウマ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は36%、100花あたりの平均寄生頭数は5.0頭でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋にアザミウマ類が侵入したイチゴハウスでは春の増殖、加害が始まる時期です。発生ほ場では速やかに防除します。
- 2) アザミウマ類の成虫は、開花している花に集まります。白紙の上で花房をたたいて、

紙の上に落ちるアザミウマ類を確認します。アザミウマ類が 10 花あたり 1 頭以上確認されると直ちに防除が必要です。

- 3) 発生が認められたほ場では、ミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマが中心の場合はファインセーブフロアブル、ヒラズハナアザミウマが中心の場合はベネビア OD またはダブルシューターSE を散布します。
- 4) ミツバチ、マルハナバチ放飼ハウスでは、ハチに対する安全期間を確かめて防除を行います。
- 5) 殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所に相談します。
- 6) イチゴの後作にトマトを栽培するほ場において、イチゴでアザミウマ類の発生を認めた場合、後作のトマトで発生しないように、イチゴの栽培終了後にハウスを閉め切り、期間を十分に取って蒸し込みます。

2. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 2 月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 前年は本病の発生が多く、第一次伝染源である卵胞子の密度が高い恐れがあります。
- 3) 今後、気温の上昇により発生に好適な条件となります。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、収穫残さはハウス周辺には放置せず、袋詰め・発酵させるなどして処分します。
- 2) 平均気温 8~18℃で、曇雨天が続くハウス内が多湿になると、発生しやすいので、温度、かん水、通風など栽培管理に注意します。
- 3) 前作で、べと病が発生していたほ場では、は種時にユニフォーム粒剤を全面土壌混和処理し、その後もランマンフロアブル等による予防に努めます。
- 4) レース 1~10 抵抗性の品種を使用している場合、べと病が発生する可能性がありますので、春の天候不順時には薬剤による予防に努めます。

(2) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 2 月下旬の巡回調査では、発生圃場率 40%、被害株率 1.6%でした。

防除上の注意事項

- 2) 本葉 2 葉期のカスケード乳剤、4~6 葉期のアフーム乳剤の散布を組み合わせた体系防除を行います。
- 3) 間引き株や収穫残さはハウス内にすき込まず、ハウス外に持ち出し処分します。
- 4) 土づくりに未熟な有機物(稲わら、もみがら、未熟な牛糞堆肥等)を投入すると発生を助長します。できるだけ腐熟させた堆肥を利用し、過剰な投入を避けます。

(3) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 2 月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 今後の気温の上昇に伴って増加が見込まれます。発生初期に葉裏に寄生しているアブラムシは見つけにくいので、葉をめくって発生の有無を確認します。特に、葉の縮れや株の萎縮が見られたら注意して観察します。
- 2) ネオニコチノイド系薬剤に対して感受性が低下したワタアブラムシが発生していま

す。薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤を連用しないようにします。薬剤の効果が低い場合には、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所に相談します。

3. ネギ

(1) べと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 2月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 今後、気温の上昇により、発生に好適な条件となります。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、発病残さはほ場周辺には放置せず、袋詰めして処分します。
- 2) 昨年、べと病が発生していたほ場では、ジマンダイセン水和剤による予防に努めます。
- 3) 多湿条件が続くと発生しますので、ほ場の排水に注意します。また、降雨前に予防散布を行います。

4. 野菜類・花き類共通

(1) 灰色かび病(イチゴ・トマト)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 2月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 天候不順でハウス内の湿度が高い状態で推移すると、発生が拡大しやすくなります。

防除上の注意事項

- 1) イチゴ後作のトマトでは、イチゴ残さで増殖した病原菌がトマト下葉に感染し、果実被害が発生します。1段目果房の開花期から幼果期までが特に感染しやすいので、定植後の初期防除を徹底します。
- 2) 曇雨天が続きハウス内が多湿になると、多発しやすいので、ほ場排水の徹底と日中の換気に努めます。
- 3) 発病した果実や葉は伝染源となるため、直ちにハウス外に持ち出して処分します。
- 4) 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しないようにします。
- 5) QoI 剤、SDHI 剤、MBC 剤に対する耐性菌が発生しています。耐性菌の発生が少ないロブラール水和剤、セイビアーフロアブル 20、フルピカフロアブル等を使用します。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農業情報システム(農作物病害虫・雑草防除指導指針)

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/nara>